



昨年夏に発生した不二サッシ工業、販売同社の粉飾決算事件で、同社の前会長は有価証券報告書虚偽記載罪と違法配当罪で起訴されている。



一方総額約四百二十億円に上る同社の大掛かりな粉飾にもかかわらず「適正決算」との監査報告書を提出していた。名の公認会計士も、有価証券報告書虚偽記載罪のほう助罪で起訴され、罰金各二十万円が課せられ、また、公認会計士協会も公認会計士法に基づいて

粉飾決算と公認会計士の社会的責任

商学部教授 高田 駒次郎

懲戒処分になっている。このように、企業の大規模化によっても、経営者と会計士の両方の責任が追求されるのは、現代の監査制度が「経営者は財務諸表の作成に責任を負い、これに対して会計士はその財務諸表が適正であるか否か」という意見の表明に責任を負う」という「二重責任の制度」に立脚しているからである。

現代の資本主義経済社会は、企業の経営規模が拡大されるにともなう、大多数のしかも多種類の利害関係者を生み出している。企業に資本を提供した株主、資金を提供した金融機関や一般社債権者、企業と売買関係を有する得意先や仕入先、労働力を提供している従業員およびその家族、法人税や事業税を徴収する国家や地方自治体、さらには一般消費者も利害関係者である。しかしながら、かかる利害関係者の中の大多数の人々には、企業の大規模化によっても、関係のない会計士も、公正不偏の立場から職業的専門家としての正當な注意をもって監査し、意見を表明する社会的責任を有しているのである。

もちろん、たとえ企業が粉飾した財務諸表を公表しようとしても、会計士がそれを発見し、かか規定されている。いずれの独立

べきか、取引先ならば取引を継続すべきかどうか、という意思決定をせざるを得ないのである。したがって、経営者は自己の経営上の指針として財務諸表を作成するばかりではなく、利害関係者の意思決定を誤らせないために、彼らの財務諸表を公表すべき社会的責任があり、また、かかる財務諸表が企業の財政状態および経営成績を適正に表示しているか否かについて、適当な専門的能力と実務経験を有し、かつ、企業と特別の利害

関係のない会計士も、公正不偏の立場から職業的専門家としての正當な注意をもって監査し、意見を表明する社会的責任を有しているのである。

わが国の証券取引法、公認会計士法および監査証明省令などに所信が表明され、また、東京証券取引所も全上場会社に対し、財務内容を適正に開示するよう要請書が出されている。かかる一連の動きを土台として、企業は適正な財務諸表を公開し、会計士も公正妥當な監査意見を表明し、もって社会の信頼を回復する日が一日も早く再来するのが待たれる次第である。

末筆ながら、本学の卒業生の中にも、谷知博一氏（十七年卒）を初め、田中寛治氏（三十二年卒）、沢村広一氏（四十七年卒）の公認会計士、佐藤元治氏（四十七年卒）、斉藤光男氏（四十九年卒）、青野弘氏（五十二年卒）、藤嶋誠三氏（五十二年卒）の会計士補がおり、それぞれ会計士事務所所属して監査業務に従事されているが、今後の一層の御活躍を祈って、ペンをおくことにする。

高田駒次郎

私には在学中硬式野球部に所属していたが、夏休命中ほとんど練習があったので、旅行とが新しいこととはできなかった。旅行と言えは、一回、夏休命中に全日本大学野球連盟大会出場のため東京に行ったことだけである。当時は急行列車博多から東京まで二十五時間かかった。新幹線はもちろん急電客車もなく、冷房のない満員列車の通路に座ったまま東京まで行ったのである。そしてまったく大きな問題は食糧であった。旅館に出ず米五升に三回分の汽

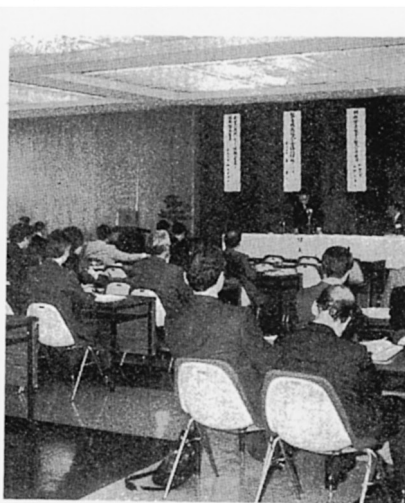
であるが、無計死体旅行や旅行のためのアルバイに熱中し過ぎないことに注意していただきた。また、当時は限のグラウンドではなく、現在西南高校のグラウンドで野球の練習をしていた。百ソドの海岸は現在では泳げないが当時夏休みに海に球の練習をしていたグラウンドのすぐ横の松林の中に寝ころんで海水浴に来た人たちが練習を見ていた先景が今でもなつかしく思い出される。しかし、海水浴も像がともなうものであり、毎必ず多くの人の水死が発表さ

車の中で食べる弁当を持って行かねばならなかった。その弁当も暑さのために東京に着くころには腐ることがあった。現在の学生は、新幹線やスカイメイトで豪華な食事付きの旅行を愉しんでいるようであるが、無計画な旅行や旅行のためのアルバイトに熱中し過ぎないようによく注意していたんだたい。

また、当時は干隈のグラウンドはなく、現在の西南高校のグラウンドで野球の練習をしていた。百道の海岸は現在は泳げないが当時は市内唯一の海水浴場であった。夏休みには野球の練習をしていたグラウンドのすぐ横の松林の中に寝ころんで海水浴に来た人たちが練習を見ていた光景が今でもうつくしく思い出される。しかし、海水浴も危険がともなうものであり、毎年必ず多くの人の水死が発表さ

（商学部教授）

新しい監査分野への
真剣な討議



そつと、翌十七日は、

が直面している新しい監査の分野
について真剣に意見が交換され、
午後四時無事大会が終了した。

一論題でつぎの四氏が発表された。①英國会社法の会計規制史に
見る財務開示および監査の拡充の
過程と大小会社区分問題（千葉
科大学・山浦公司）、②財務諸
監査の拡大の可能性（大分大学
大野公義）、③監査機能拡大の
体的枠組みについて（香川大学
森実）、④企業の存続に関する情

報の監査と財務諸表監査（中央大学・檜田信男）

以上、四氏による統一論題の發表をもって無事一日目を終了し、午後六時から本学会宿研修所で、村上寅次学長（当時）、辻和夫商

が画固している新しい監査の分野
について真剣に意見が交換され、
午後四時無事大会が終了した。

× ×

この大会を盛会の裡に終え、当
番校としてその責を果たすことが
できたのは、前述の学長、学部長
さんの中森宏研究所長、研究所職
員、学生課、庶務課、施設課の職
員の皆様の理解と協力の賜物であ
り、また、電算機センターの案内
をしてくれた会員の平田正敏所
長、半年間にわたって、準備およ
び残務整理に協力してくれた伊藤
龍峰・小林憲一両院生、そして大
会当日お世話になった学院生、
ゼミ生などの多くの方々の協力
によるものである。紙上をかりて
厚く御礼を申し上げます次第であ
る。(大会準備委員長・商学部教
授 高田駒次郎)

昭和60年1月28日（第71号）

ニューヨークのバプテスト教会を訪ねて 商学部教授 高田 駒次郎



ケイナン・バプテスト・チャーチの前で

昨年夏、ニューヨークに留学中、教会の礼拝に出席する機会に恵まれた。最初は、留学前に文学部の河野信子教授から教えられていたニューヨークで一番大きいリバーサイド・チャーチ (Riverside Church) に行き予定であった。この教会は、昔はバプテスト教会であったが、現在は超教派の教会である。そこで、同じ出席するならバプテスト教会が良いと思い、ホテルで調べたら、ケイナン・バプテスト・チャーチ (Canan Baptist Church of Christ) という教会があった。電話したら、ぜひ出席くださいと言われたので、八月十九日にタクシーで出かけた。

この教会は、ニューヨーク市・マンハッタン市の北東部にあった。古い建物で、出席者は約四百人位と思われるが、ほとんど黒人であった。西南学院教会とは違ったこのような環境に突然ほり込まれると、全く別世界に来てしまったという感じであった。日本の教会では、礼拝が始まると、最初に讃美歌を歌い、静かに牧師の説教を聞き、最後に静かに讃美歌を歌って終わりである。しかしながら、この教会は日本の教会と全く違っていた。礼拝が始まると、まず正面の壇の上に座っている赤い礼服を着た約四十人の聖歌隊が立ち上がり、身体を前後左右に揺すりながら讃美歌を歌い出した。一番が終わると、教会員も立ち上がり、同じように身体を前後左右に揺すりながら大合唱が始まった。大合唱が終わると、牧師が手を振り上げて力強い口調で説教を始めた。すると、教会員の中から一人また一人と立ち上がり、牧師の口調に合わせて力強く祈り始めた。やがて、ほとんど全員が立ち上がり、牧師の祈りに合わせて大声で祈るのである。

この讃美歌、説教そして祈りの繰り返しが続いた。最後に、全員による讃美歌の大合唱があり、約一時間四十分で礼拝が終わった。帰りに、多くの黒人と握手をしたが、最初の不安はいつの間にか消えており、ある種の感動さえ覚えたほどであった。玄関に日本の教会で言われている「収入の十分の一献金」に相当する「Together in Faith. We build not equal giving but equal sacrifice.」(信仰に基づいて献金しましょう。捧げる金額が同じではなく、捧げる犠牲が等しくなるように) という大きなポスターが非常に印象に残った。多分、このポスターは古い建物の再建のためと思われる。機会があればぜひもう一度この教会に行きたいと思っているが、その時は新しい教会に建て替わっていることを祈っている。留学の日程も終わりに近づいた九月二十三日、西南学院同窓会ロサンゼルス支部長岡崎邦男氏(昭36文卒・日本通運、西南野球部の私の後輩である砥上隆司氏(昭38商卒・米国防省関係会社)、私のゼミの卒業生である宮崎博氏(昭45商卒・広告業経営)と土斐崎誠一氏(昭48商卒・野菜卸商経営) および彼等の家族のお世話により、ロサンゼルスで同窓会を開いてくれた。日本を離れて遠いアメリカで一生懸命頑張っている彼らと西南時代の思い出、現在の苦労話を語り合い、最後に校歌を合唱したら、嬉し涙がぼろぼろ出て仕方がなかった。彼らの成功と健康を祈りながら再会を期して、九月二十六日に帰国の途に就いた。

平成2年6月30日(第93号)

日本会計研究学会九州部会 第50回記念大会 本学で開催

日本会計研究学会九州部会
第五十回記念大会は、本年
八月一日(土)、西南学院大学
本館大会議室で開催された。

この大会は、その名が示す通り、日本会計学会九州部会が発足してから、第五十回目に当たっており、それを記念し、今後の同部会のますますの発展を願って、とくに盛大な学会としてという意図のもとに、企画、開催されたものである。

実は、この九州部会については、約二十年前その発足第一回をこの西南学院大学で開催し、その後、第十周年記念大会をも、この西南学院大学で開催したという事情がある。このような部会の歴史の節目節目で重要な大会を開催したという自負もあって、関係者一同はこの第五十回大会の開催依頼を快く引き受け、故高田教授は準備委員長として大会を成功に導いた。

大会は、出席者は約五十名にも達し、盛会であった。午前中の幹事会に続き、学会報告は、一時より、九州産業大学・伊藤龍峰氏、および九州大学・徳賀芳弘氏によりそれぞれ会計監査論、国際会計論の問題を中心になされ、熱心な討議が繰り広げられた。続いて九州部会の長老であり、部会創設の功労者の一人である熊本商科大学・佐藤好孝教授による記念講演会がもたれ、終了時間は、予定時間をはるかに越える盛大な記念大会となった。故高田教授の最後のお仕事となったことを思い、感慨無量である。

(報告・商学部教授 山口 稻生)

平成4年11月5日(第102号)